

ザジーと打ち上げ花火大会

「ザジー！ バジー！ マジー！
どこに いるの？」 お母さん
リスが 子どもたちを よんでいます。
子リスたちが もどって来ると、
お母さんリスが 言いました。
「急がないと。フクロウじいさんが、
小さな 動物たちは みんな、集まって
ほしいそうよ。」 さて、動物たちが
みんな 集まると、フクロウじいさんが
話し始めました。「人間の 世界では、
ある 特別な 行事が あるそうじゃ。
空が 暗くなった 時に 広場に 来て
上を見上げると、何かが 見えるそう
なんじゃ…。えっと…あれは 何と
言ったかのう…う～ん…ああ、思い
出したぞ！ 火花じゃ！ いや、
ちょっと ちがうの…ええ～っと…
火の 棒！ …いやあ、それも
ちがう。…そうじゃ！ 花火じゃ！」



はなび どうぶつ
「花火？」 動物たちの
こえ 声が こだましました。

「それは そらの ショーで、
ひじょう おお 非常に 大きくて 明あか
るさい ものじゃ。人間は、
それを とても きれいだと
おも 思っている。今夜は 広ば
あつ 集まって、みんなで それを
み 見ようかと 思っている。
こ おや
子どもたちは、親と いっしょに
いること。そして、時じ かん
が とても おそくなるから、
こ 午後には ぜひ、ひる
しておく ことじゃ。では、
たの 楽しんでくだされ！」

ザジーが と あ
飛び上がりました。
「やったー！ 今夜は たの
なるぞ！」

いえ かえ かあ
家に 帰ると お母さんは、
はなび み ひる
花火を 見たいなら 昼ねを
するように、と 3びきの
こ い き
子リスたちに 言い聞かせました。



「花火は、あなたが ねる
時間よりも ずっと 後に 始まるから、
今 昼ねして おかないと、花火の
真っ最中に ねむってしまうわよ。」

「そんなに わくわくする ことが
あるのに、ねむくなんて、絶対に
ならないよ。ぼくには 昼ねなんか
ひつよう 必要ないよ。」 ザジーが 口を
はさみました。

「ザジー。ねむれなくても、
横になって 休むのよ。」

ザジーは ふきげんな 顔を
しました。枝を ちょちょこっと
登ると、横に なって ふくれつつらを
していました。葉っぱの 間からは、
バジーと マジーが ねむって
しまったのが 見えます。

「ぼくは もう 大きいんだ。
昼ねなんか しなくたって、花火の
間中、起きていられるさ。」

ザジーは ひとり言を 言いました。



ザジーは うつぶせに なって、
木の 皮に 絵を かき始めました。
そうこう しているうちに、2時間は
あっという間に 過ぎてしまいました。
マジーと バジーの 話し声が
聞こえたので、昼ねの 時間は
終わったのだと わかりました。
広場に 小さな 動物たちが
みんな 集まった 時には、すでに
とても 暗くなって いました。最初の
花火が 空に 上がって ぱく発し、
さまざまな 美しい 色が 空中に 広がると、
動物たちは みんな、おどろいて
息を のみました。

「何て きれいなのかしら!」
マジーが 声を 上げました。

「すごいねえー!」 そう
言いながら、ザジーは 大あくびを
しています。



ザジーは 目を こすりながら、また あくびを
しました。(つかれたなあ! まさか、今
ねむくなるなんて!)

ザジーは 何とか 目を 開けていようと
一生けん命でしたが、それでも すぐに また
目は 閉じてしまいました。まもなく ザジーは、
ぐっすりと ねむってしまいました。

「ザジー! 起きなさい!」 お母さんが
ザジーを ゆり起こしました。「朝ごはんの
時間よ!」

「何だって? 花火は どこ?」 ザジーは
くるったように なって、たずねました。

「ざんねんね。花火の とちゅう、あなたは
ねむって しまったようね。マジーが あなたを
起こそうと したけれど、全然
起きなかったのよ。」

「花火を 見そこねちゃったよー!」

ザジーが ベソを かきました。

お母さんが うでを 回して、ザジーを
なぐさめようと しました。「そうね。本当に
ざんねんだわ。でも、あなたが そんなに
つかれていたのには、わけが あるんじゃない?」





ザジーは うなずきました。「ぼく、^{ひる} 昼ね しないで、^き 木の えだに ^え 絵を ほっていたんだ。
^{ひる} 昼ねを しなさいって ^い 言われた ^{とき} 時に ^い 言いつけを ^{まも} 守らなくて、ごめんなさい。」

そこへ ^{どう} お父さんが ^き 来て、^い 言いました。「ザジー。おまえが ^み 見そこねた ^み ものを見る
チャンスが、もう1回 ^{いっかい} ありそうだぞ。コマドリさんからの ^{でんごん} 伝言で、^{こんや} 今夜も ^{はなび} 花火が
あるそうなんだ。」

「ぼく、^{かなら} 必ず たっぷり ^{ひる} 昼ねを するよ。」と、ザジーが ^い 言いました。

^{かあ} お母さんと ^{どう} お父さんは ほほえみました。「いい ^こ 子だわ、ザジー！」

その ^ひ 日の ^こ 午後、ザジーは ^{なが} 長い ^{ひる} 昼ねを しました。^{よる} 夜に なって ^{はなび} 花火が ^{そらじゅう} 空中を
きれいに ^て 照らし始めた ^{はじ} 時には、ザジーは ^{ひと} 一つの ^{はなび} 花火も ^み 見のがしませんでした。

それからと いうもの、ザジーは、^{どう} お父さんや ^{かあ} お母さんが ^{なに} 何かを ^い しなさいと ^い 言う
^{とき} 時には、^{じぶん} たいていは ^よ 自分の ^{りゆう} ためにも ^い 良い ^い 理由が あるのだと わかるようになりしました。